
夕日の見える日に

シャリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日の見える日に

【Nコード】

N5256H

【作者名】

シャリン

【あらすじ】

いつものように伊藤たちに呼び出された洋はいつもとは違う“遊び”をやらされる…。

（前書き）

初めての作品です。

小説とは言えない文章かもしれませんが読んでいただければ光栄です。

十月のある日、夕方のコンビニで洋は体から季節に似合わない大量の汗を流していた。

五つの好奇の視線が洋に集まる…。

（やっぱり無理だ…。）

…十分前のことだった。

いつものように洋は四階から屋上に続く階段に呼び出されていた。屋上は立ち入り禁止でめったに人がこないのもその階段は伊藤たちの絶好の溜まり場だったのだ。欠点といえば掃除をしないのでゴミや虫の死骸があるということくらいだろう。

洋が階段に着いたのに最初に気づいた五十嵐が洋の腹に蹴りを入れた。

「…ぐふっ！」

「遅えんだよ。二分で来いっつたろだろうが。」

「いいよ五十嵐、…そういうのダルい」川倉が五十嵐を止めたのは洋の体を気遣ったのではなく、五十嵐があまり洋を殴ると体力を消耗するので“遊び”に支障をきたすと考えたからだろう。

川倉はいつもなら眺めているだけである

しかし川倉はさっき思いついた新しい“遊び”を早くしたくてたまらなかったのだ。

「洋い今日はお前のために新しい遊び考えてやったぞ。」

そう言つて笑うのは取り巻きの一人の大室だ。

新しい遊びと言われても洋には嫌な予感しかなかった。

“ルール”を伊藤から聞き洋を含めた六人は近くのコンビニに向かった…。

時刻は十四：二六分

三十分までにやらないと五人全員から顔に煙草を押しつけられる事になっていた。そんなことされるくらいなら、と意を決しお酒のコーナーに向かう。

洋の頭の中で色々な考えが張り巡らされた。

…捕まった時の事、成功したとしても後から学校や家に電話がこないか…。

成功したとしても学校に電話はあるだろうなにせ洋は制服なのだ。

そんなことを考えているうちに二八分になってしまった。

覚悟を決め伊藤に注文された品物を五つ手にする。

洋の心拍数が余計に上がる。

五個というの予想はしていたがやはり重いようだ。

焦りながらも洋は酒をバッグの中にしまい駆け出した。

店員は驚いていたがやがて洋を追いはじめた。

洋の足は遅くないが荷物を持つてるとさすがにキツイ。洋は追いつかれるかもしれないと思つたが振り返ることもせずただ全力で走つた。

幸い人通りが少なかったので走るのに難はなかった。

息を切らしながらしばらく走ると伊藤たちと約束してた公園に着いた。

五人の姿はまだ見えない。

店員も撒いたようだ。

とりあえずは安心したがこんな事がこれからも続くのかと思うと憂鬱で堪らない…。

そんな事を考えていると背後から肩をたたかれた。ふと振り返るとそこには洋が今一番会いたくない人が立っていた。

「警察だけちょっと署まで来てくれるかな？万引きの通報があったね。」

洋は陰に隠れてこっちを見ている五つを見つけた。
ため息すらでない…。

綺麗な夕日が公園と洋をただ照らしていた…。

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
感想、アドバイス等いただければ作者の力になりますので是非。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5256h/>

夕日の見える日に

2010年10月11日20時11分発行